

## P19 乳歯癒合歯ならびに先天性欠如歯と後継永久歯との関係について—第2報—

Part II : A study of relationship among fused primary teeth, congenitally missing teeth, and successive permanent teeth

○立岩 朗<sup>1)</sup>, 田中丈也<sup>1)</sup>, 榎原康生<sup>1)</sup>, 副島之彦<sup>2)</sup>, 金沢真亨<sup>3)</sup>, 岩崎 浩<sup>4)</sup>, 宮沢裕夫<sup>4)</sup>  
Akira Tateiwa<sup>1)</sup>, Takeya Tanaka<sup>1)</sup>, Yasuo Kuwahara<sup>1)</sup>, Yukihiko Soejima<sup>2)</sup>, Masayuki Kanazawa<sup>3)</sup>  
Hiroshi Iwasaki<sup>4)</sup> and Hiroo Miyazawa<sup>4)</sup>

ハート小児歯科<sup>1)</sup>

小児歯科スマイルプラザ<sup>2)</sup>

カナザワ小児歯科<sup>3)</sup>

松本歯科大学小児歯科学講座<sup>4)</sup>

Heart Pediatric Dental Office<sup>1)</sup>

Smile Plaza Pediatric Dental Office<sup>2)</sup>

Kanazawa Pediatric Dental Office<sup>3)</sup>

Department of Pediatric Dentistry, Matsumoto Dental University<sup>4)</sup>

【目的】小児歯科臨床において、乳歯の歯数異常や形態異常を主訴に来院する患児を多くみかける。

歯数や形態の異常は歯胚の発育異常に起因するもので、退化現象の現れと考えられている。

临床上、乳歯に癒合や先天性欠如がある場合には、その後継永久歯も癒合や先天性欠如を認めることがあり、そのような症例では永久歯咬合の成育に十分な配慮が必要となる。

そこで、検診にて管理中の患児の中から乳歯列に認められた癒合歯と先天性欠如歯、およびその後継永久歯の異常の有無について調査したので報告する。

【対象と方法及び結果】調査対象は検診で管理中の4歳から6歳までの1000人(男児500人、女児500人)の患児とした。

医療面接、視診およびパノラマエックス線写真にて、乳歯列に認められた異常症例を抽出し、さらに前歯交換後のエックス線写真から後継永久歯の診査を行った。その結果

癒合歯は3.6%の発現を認め下顎前歯部に好発した。そのうち片側性の癒合歯が多く80.6%であった。また先天性欠如歯は1.2%に認められ、下顎前歯部に好発した。そのうち片側性が58.3%であった。

後継永久歯との関連については、癒合症例は44.4%に異常が認められ、先天性欠如症例においても66.7%の高頻度に見られた。乳歯両側性異常症例は片側性よりも高頻度に異常の発生が認められた。